

メッセージアウトライン 創世記17:1～27「契約のしるし」

[1-2] 「さて、アブラムが九十九歳のとき、主はアブラムに現れ、こう言われた。『私は全能の神である。あなたは私の前に歩み、全き者であれ。わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたを大いに増やす。』」

16:16節からすでに十三年たっている。妻のサライはアブラムより十歳年下なので(17)、この時八十九歳ということになる。人間的な常識ではこの二人の間に子どもが生まれるはずがない。しかし、このような人間的に見れば不可能と思える状況を通して主はその約束を実現に至らせ、栄光をあらわされるのである。「全能の神」エル・シャダイ…つまり何でもできるお方であることを強調している表現。人間にとっては不可能であっても神にとっては不可能ではない。「あなたは私の前に歩み、全き者であれ」これは道徳的に何の欠陥もないというのではなく、神との契約関係における健全さ、誠実さのことであり、信仰者は神の前にうそ、偽りなく誠実に歩んで、神が結んでくださった祝福の契約を受けるにふさわしい者となっていくことが求められている。2節は15:5~7節で神がアブラムと結ばれた契約の再確認である。

[3-8] 「アブラムはひれ伏した(3)」彼はこのような祝福の契約を受けるにふさわしくない者であることを自覚し、それゆえ恐れかしこみ、ひれ伏したのである。ここにはお互いが対等の立場で交渉して契約を結ぶという要素は全くない。真のへりくだり、謙遜こそ神との関係において最も大切なことである。

4~5節で主はアブラムが多くの国民の父となるということ、そして名前をアブラムへと変えるべきことを告げられた。「アブラム」…高貴なる父「アブラム」…多くの国民の父。名前が変わるということは大きな意味を持つ。このことは彼が今までのメソポタミアから出てきた羊飼いの長としてのありかたではなく、新しい出発点に立ったことを意味する。彼は多くの国民の父となるのである。→ローマ4:16「わたしは、あなたをますます子孫に富ませ、あなたをいくつもの国民とする。王たちが、あなたから出てくるだろう(6)」これは彼の子孫のイスラエル民族とその王たちのことも含まれるが、それだけではなく、アブラムの血を引くイシュマエルやその他の子孫も含まれると考えられる。→創16:10、25:1~4霊的に言えば、彼は信仰によるあらゆる国民の父なのである。

7節では主がアブラムと結ばれた契約は永遠の契約であるということが強調されている。「代々にわたる永遠の契約」…この契約はアブラム一代で終わるのではなく、その子孫にも受け継がれていく。そして主は彼の子孫の神ともなられるのである。8節は12:7、13:15,17の再確認である。

[9-14] 次いで主は契約のしるしとして、アブラムと彼に属するすべての男子は割礼を受けるべきことを命じられた。割礼はメソポタミア地方では行われていなかったが、エジプトやパレスチナ地方では以前より行われていた。これは種族としてのつながりのた

めの社会的な慣習であったが、これがアブラハムとその子孫が主なる神と契約を結んでいるしるしとして採用されたのである。以後この割礼はイスラエル人にとって宗教的な意味を持つ儀式となる。「生まれて八日目に割礼を受けなければならない」これは神の契約の民としての人生のスタートのしるしとなり、生まれて八日目は一番感染症などにかかりにくい時期であるといわれている。またこの神の契約の対象はアブラハムの実子という血のつながりだけではないこともわかる。これはやがてイエス・キリストを通して与えられる神の普遍的な救いを象徴的に示す出来事である。イエス・キリストによる救いは単にイスラエル人だけではなく、世界中の民がその信仰によって与えられるものであり、神の御子イエス・キリストを自分の救い主と信じる者は一人も滅びることなく永遠のいのちを持つ。→ヨハネ3:16

[15-16] 続いて神はアブラハムの妻サライもその名を「サラ」とするように仰せられた。「サライ」も「サラ」も王女、または女王という意味で内容に変わりはないが、「サライ」のほうがより古い形らしい。改名の理由については何の説明もないがアブラハムと同様、この時は新しい転機となるのである。

神はサラに男の子を与え、彼女を祝福し、彼女は国々の母となり、もろもろの民の王たちが彼女から出てくるといことも約束された。これは6節のアブラハムへの約束と重なるところであるが、彼女に対する直接の祝福のことばとして意義のあるところである。16:10~12節のハガルへの主のことばと比べてみると、どれだけサラへの祝福がすぐれているかがわかる。

[17-21] 「アブラハムはひれ伏して、笑った。そして心の中で言った。『百歳の者に子が生まれるだろうか。サラにしても九十歳の女が子を産めるだろうか。』そして、アブラハムは神に言った。『どうか、イシュマエルが御前で生きていますように。』」(17~18) アブラハムはひれ伏して礼拝の態度を取っているが、心の中では神の約束をすなおに受け入れていない。その理由は彼らの高齢にあった。百歳、九十歳というのは概数で実際は17:1節によればそれぞれ九十九歳、八十九歳であった。人間的な面から言えば子を産むことは確かに不可能であろう。それゆえ彼は「どうかイシュマエルが…」と言ったのである。彼はこの時点までイシュマエルが約束の子であると信じようとしていたことがわかる。しかし、神は彼の妻サラが男の子を産むこと、その名をイサクと名づけること、そしてそのイサクとの間に契約を立て、後の子孫のために永遠の契約とすると言われた。(19) 「イサク」…「彼は笑う」の意。ありえないこととしてアブラハムが笑ったにもかかわらず与えられる子としての意味が込められている。神はこのイサクによってアブラハムとの契約を継続されていかれるのである。

「イシュマエルについては、あなたの言うことを聞き入れた。…」(20) 神はイシュマエルについてもアブラハムの願いを聞き入れられる。「十二人の族長たちを生む」→創25:13~16 そしてイシュマエルも大いなる国民となる。彼はアラブ民族の先祖の一人となる。

「しかし、わたしがわたしの契約を立てるのは、サラが来年の今ごろあなたに産むイサクとの間である」(21) 神が契約を結ばれるのは神が選ばれたイサクであって、イシュマエルではないことがはっきりとわかる。しかもアブラハムの不信の笑いに答えるかのように、子どもが生まれる具体的な時期まで「来年の今ごろ」と示された。このようにして神の約束を待つことにおいて何度も失敗を繰り返したアブラハムもついに決定的な一年を迎えることができるようになるのである。

[22]「神はアブラハムと語り終えると、彼のもとから上って行かれた」

どこへ、どのようになどの説明は一切ない。これはアブラハムが幻の中で見たことか、肉眼で見たことかの説明も一切ない。それゆえ、私たちもこれ以上詮索することはできない。しかし、神が天に上られたということは間違いがないであろう。

[23-27] アブラハムは神の命令を早速実行に移す。この時アブラハム九十九歳、イシュマエル十三歳であった。以後、神の命令をすみやかに実行に移すのは彼の信仰の明確なスタイルとなっていくのである。主なる神はアブラハムに「あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と言われ、契約関係における誠実さを求められた。そして契約の具体的なしるしとしてアブラハムに属するすべての男子は割礼を受けるべきことが命じられた。これは彼の子孫であるイスラエル民族が神の契約の民であるということのしるしとなるとともに、彼が信仰によって義と認められたことの証印なのである。

私たちもアブラハムのしもべや外国人の子孫たち同様にイスラエル人ではないが、アブラハムの信仰にならう者としての霊的なイスラエルであり、アブラハムは私たちの信仰の父なのである。→ローマ4:16

アブラハムがその信仰によって主なる神のすばらしい祝福と恵みをいただいたように、私たちも信仰を働かせて恵みを受け継ぐ者となっていくことが大切である。私たちもさまざまな弱さや愚かさの中にある者であるが、主を信頼する者に主は必ず導きと祝福の御手を伸べてくださる。弱さのまま、愚かさのまま、正直に主にゆだね、主の御手に引かれて一步一步、歩いていこう。主は決して私たちを裏切られるようなお方ではない。→ローマ4:9~13